

マニフェストの発表内容

① 松山議長

まず、私の提案は、京都は職人のまちということで、第1点としては、その職人たちが修行できる環境を作りたいと思っています。これは、もちろん我々お坊さんの世界のほか、お花、舞、植木屋、料理と色々な修行をしに京都に来られています。しかし、修行は非常に厳しいものですから、途中で挫折していく方も多いです。その一つの要因は、自分たちしか苦しい思いをしていないという誤解があるからだと思います。ですから我々だったら、舞妓やお花の修行を見て、皆厳しくても一生懸命頑張っているという姿をすることで、自分もやる気が出ますし、人脈もできると思います。そのために、修行されている方を横断するような組織を作り、将来のステップアップになるようなものを作りたいと思っています。

2点目として、行政に何かを頼む、サポートしてもらう、お金をもらうなど、今はそういう時代ではありません。自らを高めると言う姿勢が特に若者には必要だと思います。特にここは京都ですから、例えば全員着物を自分で着られるようになるとか、伝統文化に造詣が深いとか、自分たちをもっともっと日本の文化、京都の文化に触れさせて、そして自分自身を高める組織、若者だからこそできる組織を作っていきたいと思っています。

3点目として、京都は大学のまちですが、若者のまちではないと思っています。卒業すれば大阪、東京などに行き、京都に残りません。また不景気で京都ではなく、地元の大学に行っている人もいます。もちろん行政にお願いして、学費や宿泊のサポートもいいのですが、自分たちで学費が稼げる、泊まる場所は見つけられるという、自分たちで起業できるようなサポートができないかと思っています。市に何かを頼むのではなく、自分たちで何かをする力を持っている人をサポートすることで、自分自身ももっと高められればと考えています。よろしくお願いします。

マニフェストの発表内容

② 越村副議長

私のマニフェストについて、私は夫の家業である友禅染の仕事をしています。嫁いで8年位になりますが、友禅染は、ここ30年、40年と厳しい状況が続いています。そういう状態の家業を何とかしたいという思いがあったため、私自身は一緒に家業を手伝う若女将といった側面だけではなく、違う点から支えられたらと思い、子どもが生まれてから大学院に通いました。

若いうちにチャレンジできる場が京都には色々あるものの、なかなかそれを活かしきれておらず、演劇や芸術、伝統産業の後継者育成について私自身は研究していますが、若い人が大学生も含めてたくさんいるのに、卒業後にはいなくなってしまうことがあります。そういう人が京都で生活し、子育てができるまちにしたいということで、私自身、子どもがいることもあり、ワークライフバランスを実現できるまちということを書かせていただいています。

今後の10年で、若い人が中心になって、色々な場面で活躍できる場を作っていきたいと思い、今後50年くらい生きる中で、何ができるのかを踏まえて、若者会議の方々と作っていきたいと考えています。

マニフェストの発表内容

③ 安田副議長

私のマニフェストについて、自分がなりたいものとして、クリエイティブプロデューサーを挙げています。その理由として、京都には芸術大学が多いが、発表できる場が少なく、若い人たちが発信する場所・人が非常に少ない現状を嘆いており、自分がそれをしたいと思っています。

京都の姿については、「美しき京都確立」と書いています。モノを作る際に必要なものは、余裕と好奇心。この2つがないと良いモノは作れないと考えています。私は東京によく行きますが、確かに刺激は多くやりがいはあるのですが、せかせかして余裕がありません。その点、京都は余裕があり、新しいもの、伝統産業など、好奇心を刺激するものもあり、非常にバランスが取れた美しいまちだと思います。そういう余裕と好奇心を満たすまちにしたいと思っています。

マニフェストの発表内容

④ 平岡委員：

月刊誌リーフの編集をしています。

私のマニフェストについては、御笑覧いただく程度で結構ですが、京都のマニフェストについては、若者らしいという視点をひっくり返すようですが、高齢者との付き合いを重要視しています。私は兵庫県出身で、大学から京都に住んで仕事をしています。そういう人間には、京都の地域との交流は薄く、周りの人を見渡しても、途中から京都に住んだ人だけでなく、昔から住んでいる人でも核家族化などにより接点が薄れています。

京都にはたくさんの伝統的な文化も残っており、大きな意味での伝統という面だけでなく、個人の生活者の知恵、おばあちゃんの知恵などを受け継いでもよいのではないかと思ってマニフェストを書いています。マニフェスト自体は他力本願的な発想で書いてはいますが、接点のない者がどうお付き合いしていくのかを検討したいと考えています。

マニフェストの発表内容

⑤ 深田委員

私は、ブルーバード、日本患者学会という社会起業の団体をやらせていただいています。社会起業とは社会問題、公の問題をビジネスの発想で解決するというもので、私は医療の問題に取り組んでいます。

マニフェストについて、京都の姿としては、学生・若者が新しい価値観を提供して、地域や世界の問題を解決するまちということを挙げています。

他の方のマニフェストを聞いていても起業的発想で解決するとか、ワークライフバランスなど若者として共通点があり、価値観を共有できると思っていますのですが、京都は、常に新しい価値観を提供することで成長してきており、新しい価値観を提供することにより、地域の幸福度を上げることができるのではと思っています。

その戦略として、社会起業という方法、つまり民間の中で問題を解決することを支援する形を提案しています。また、未来志向型の学校教育、あるいは社会起業で京都をナンバーワンにすること、そして、家族を大切にするという価値観で話をする事で全体とつながっていけるとしています。

⑥ 山口委員

同志社大学大学院総合政策科学研究科の准教授で、大阪の浄土宗のお寺、應典院で僧侶をしております。

私は、「伝統を常に上書き保存するまち」を掲げています。いつかあの時これがあったという伝説と、昔あった先人たちの知恵を自分たちのものとして大切にリレーしていく伝統とは全く異なります。京都は、自分たちの誇り得るものは何かを常に見つめ、より良い未来を創造していくまちであって欲しい、そういう願いを込めています。

私自身のマニフェストは、浄土宗の宗祖、法然上人の言葉ですが、「愚者の自覚」を掲げています。これは、常に、できる自分を捨て、できない自分に悩み、今の自分に誠実に向き合っていくという意味です。

両者を比較してみると、京都のマニフェストはバックキャスティング、すなわち、この時期にはこうなったら良いということで書いていますが、私自身のマニフェストは、こつこつと今を見つめていくべしと視点からまとめました。

伝統を常に上書き保存する、そのためには何らかの実践を積み上げていくことも必要です。例えば、1日6回、市内のどこかで語りの場を実施すれば、2015年には、10,000回を達成します。

また、そうして目標を定めるだけでなく、記念の年にその意味を見つめる機会を生むことも大事でしょう。ですので、京都議定書策定20周年となる2017年には、一過性のイベントではなく、京都はやはり議定書が生まれた地だと実感できるような取組ができないかと提案をさせていただきました。具体的には、唐突かもしれませんが現代アートを掲げました。実は私の専門はコミュニケーションです。そこで、人を阻害せず、よりよい生活環境の雰囲気を生み出すためには、一見訳の分からないアート作品と、それを生み出すアーティストの創造性に力を借りてみてはどうかと考えました。

そして10年後、2020年には、東アジア並びに世界の文化首都として、京都が世界に誇り得る、そして単なる集客だけでなく、みんながまちに集い、語り、遊ぶ主体になっていればと思っています。私が京都で過ごした20代の暮らしは良い思い出に満ちています。そんな20代に思いを馳せつつ、40代をどう迎えるかを考えての提案でした。